




高崎可南美(21)

地味JD。彼氏が
出来たことが無く
友達も少ない。

ファッションセンスが
皆無な上に中学生に
間違われるほど貧相な
体型がコンプレックス。
ある日通販で魅力的な
身体を手に入れることが
できるという謎のアイテム
を知り購入。彼氏を作る
ため利用することに。







「こ、これ本当に大丈夫かなあ…」
美肌効果、バストアップ…そんな
売り文句に惹かれて謎の美容用品を
買った可南美。しかし、彼女の下に
届いたのは瓶に入った謎のねちゃねちゃ
としたナメクジのような紫色の生物
だった。これを自分の性器、膣で飼う
ことで美容に効果があるということだ。
普通なら信じがたいことだが、必死な
可南美は妄信し男のモノどころか
自分の指すら挿入れたことのない
肉穴に謎の生物近づける。



成人したのにも関わらず1本も毛の生えていない綺麗な割れ目に、謎の生物が貼り付く。

少し上目に乗せてしまい、触手が陰核を撫でるように動く。可南美はビクンと身体を震わせながら感じてしまう。自分で触れるのとは全く違う感覚、謎の生物に大切なところを触れられているという感覚に恐怖を感じながら、しかしナメクジの体液以外の液体も見え始める。



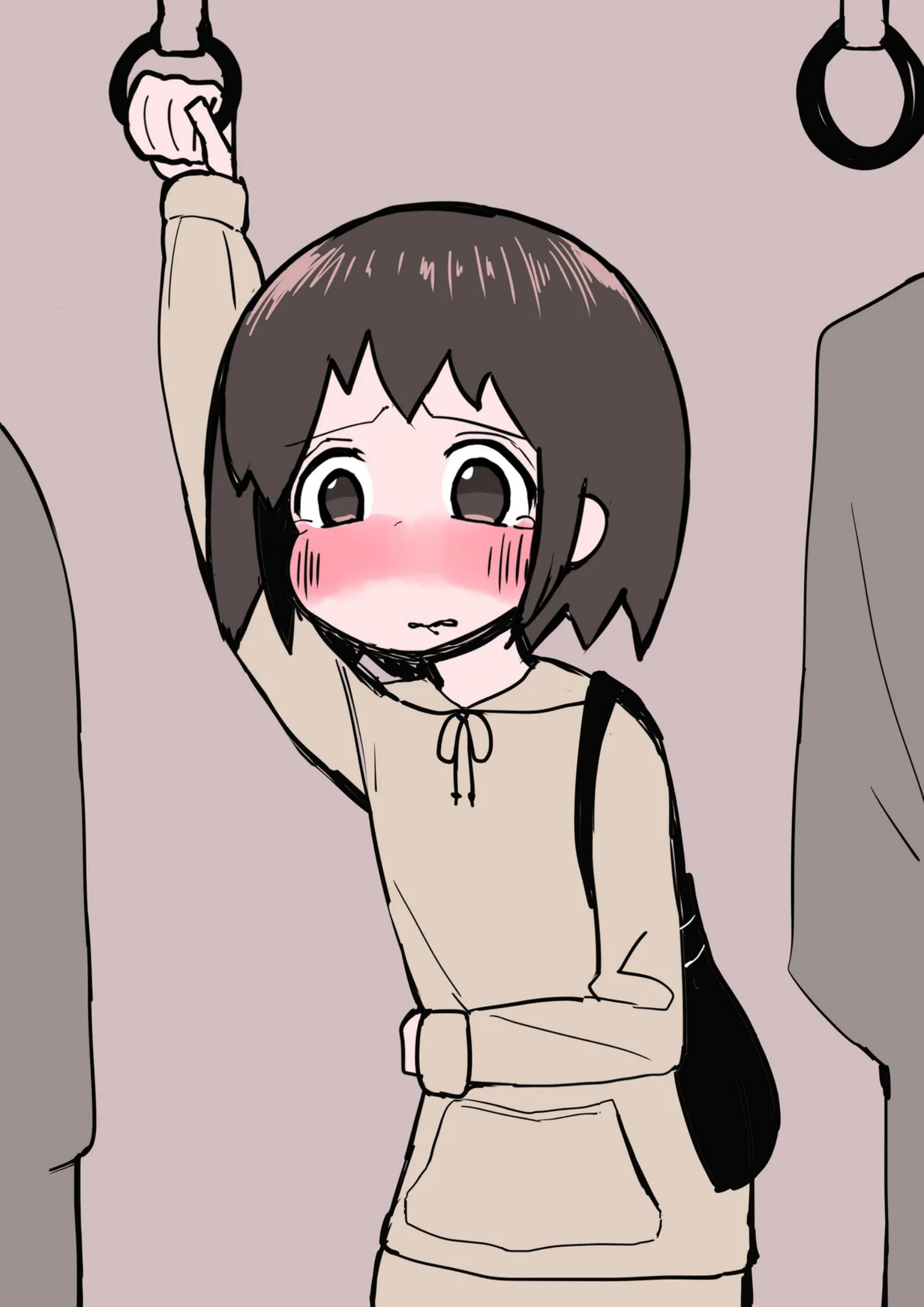
「んっ…あ…ッ」


湿り気の増えてきた割れ目について触手が侵入を始める。

柔らかな体なので経験のない可南美の穴を全く傷つけずに突き進む。しかし、挿入の初めての彼女の身体には処女膜がある。流石に膜を残したまま侵入はできない。可南美は自分の大切な膜がじわじわと破られながら未知の生物が身体の奥へと向かっているのを確かに感じる。




10分ほどかけて触手が彼女の膣の中に収まる。小さいながらも確実に体内に触手の存在を感じる。奥に進んだり出口ギリギリまで出てきたり…更にはGスポットを刺激したり子宮口を撫でまわしたりと一切休みなく動き続ける触手。こうなると触手は満足するまで出てこないためこのまま生活することになる。こうして触手を自分の身体で飼うことになった。







日常生活でも膈内で自由に動き回る触手。
周りに人が居ようと関係ない。可南美の
膈内の体液や血液を吸収して少し成長した
触手は、彼女の肉穴をより圧迫し存在感を
感じさせる。ヌメヌメとした感触が内壁を
擦り快感を生む。



ぐちゅぐちゅと自分の腹の中で異物が動いているのを感じさせられる可南美。ある程度動き回ると触手から更に細い触腕が伸び、彼女の初心な子宮口を弄り始める。当然何ものにも触れられたことのない、自身で最奥と感ずる部分を執拗にほじくられ汗が溢れる。



子宮口をこねくり回していた触腕が突然
その細い穴をこじ開けて子宮内へと侵入
してきた。その奥が無いと思っていた可南美は
下腹部を襲う鈍痛と、感じたことのない子宮内
粘膜への感触に顔を青ざめながら、しかし身体
は快感を感じ始めていた。



子宮の入り口や内壁を撫でまわしていた
触腕が、今度は子宮口に触腕を出し入れ
し始めた。小さく、本来出産時にしか使われない
穴へのピストンが、性の経験が無かった
初心な可南美を襲う。激痛と、しかし、粘膜を
擦られることによる快感が同時に押し寄せ
彼女は大勢の人が乗っている電車の中で
絶頂してしまう。



排泄時。尿を出そうと下腹部に力を入れると
触手にもゆるりと割れ目から顔を出す。
小陰唇にぬめぬめとした感触が伝わり
不快感にぶるぶると身体が震える。



「んっ…ッ」
尿道口が開きついに尿が出ようとした瞬間、触手が膣から体を出し触腕を尿道に挿入する。

にゆるにゆると本来モノが挿入されるはずのない穴に触腕が入ってくる感覚にビリビリと下腹部に違和感を感じる。



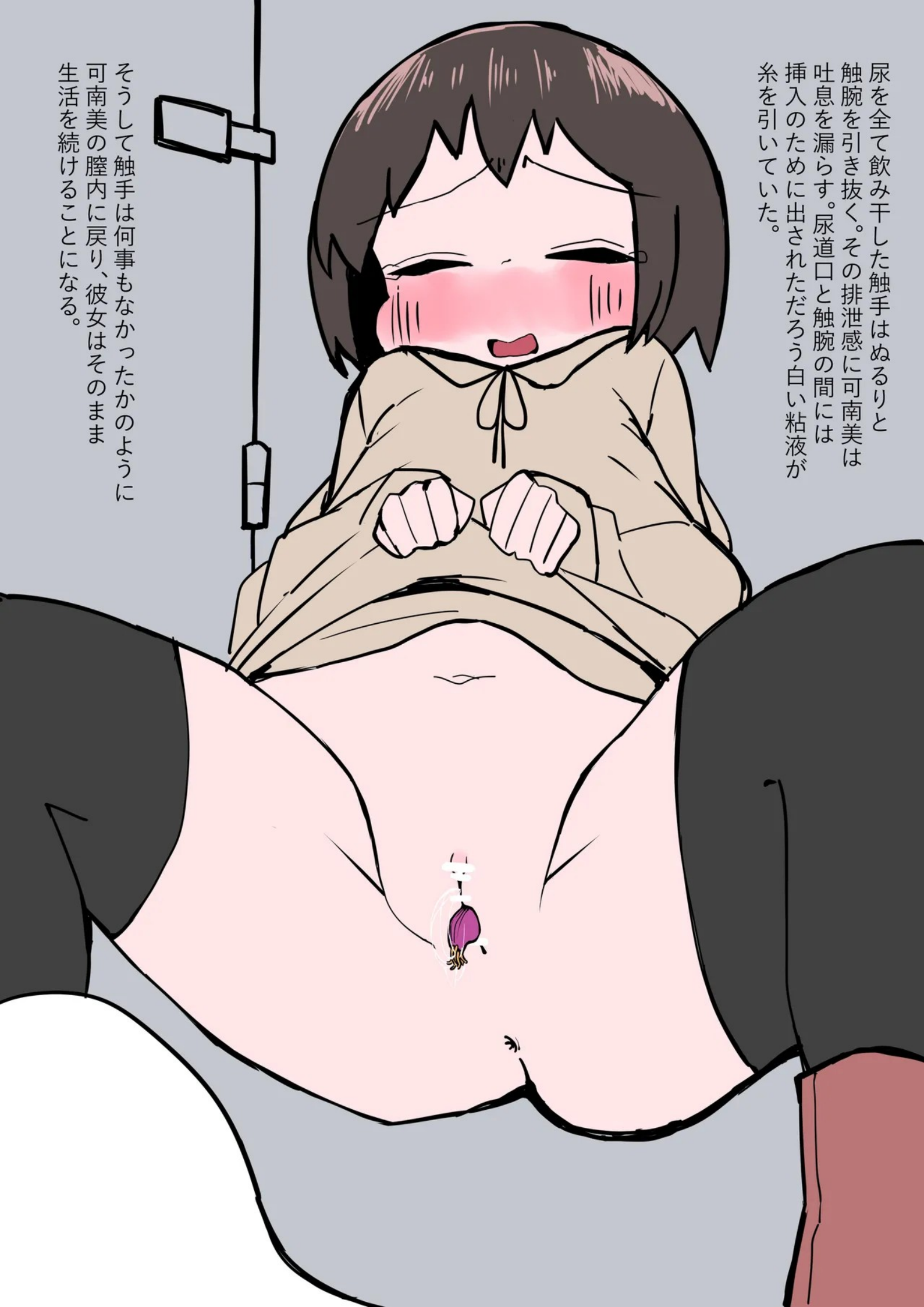
今まさに出ようとしていた尿が堰き止められ可南美は頭が真っ白になる。そして触手が触腕から尿をごくごくくと吸収する。彼女から出る物は全て養分となる。

自分の意思を無視した排尿に困惑する。しかし、尿道を刺激された可南美の身体は知らず知らずのうちに陰核を勃起させていた。



尿を全て飲み干した触手はぬるりと
触腕を引き抜く。その排泄感に可南美は
吐息を漏らす。尿道口と触腕の間には
挿入のために出されただろう白い粘液が
糸を引いていた。

そうして触手は何事もなかったかのように
可南美の膣内に戻り、彼女はそのまま
生活を続けることになる。





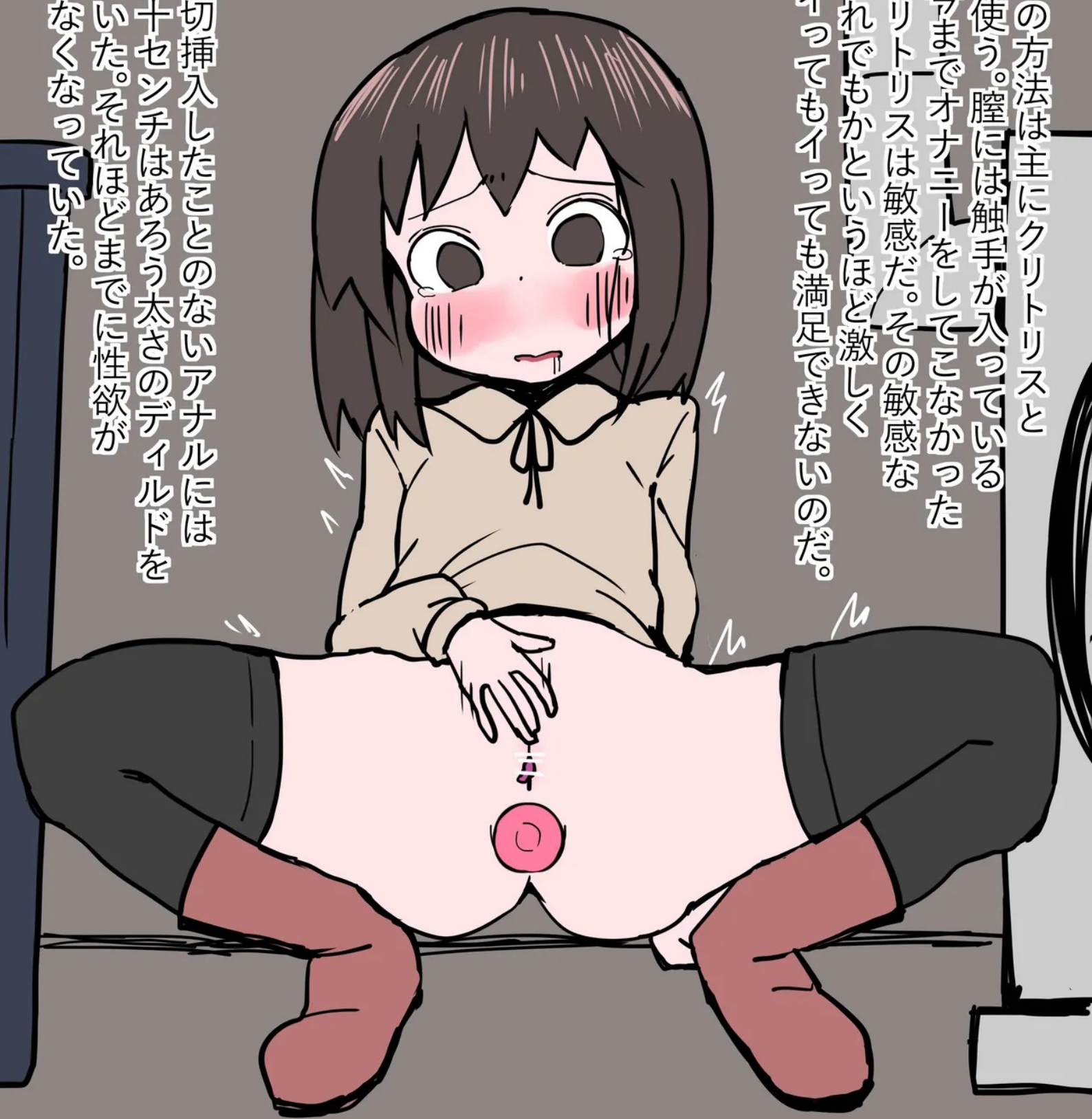
触手が活性化してくると宿主の性欲が異常なほど高くなる。彼女の絶頂が触手の成長に繋がるからだ。今まで一切性欲の無かった可南美が四六時中オナニーをしていたくなるほどの効果だ。

我慢しきれない彼女は外出先でも自慰を始めてしまう。むしろ外という事が更に興奮材料になってしまう。



オナニーの方法は主にクリトリスと
アナルを使う。膣には触手が入っている
からだ。今までオナニーをしてこなかった
彼女のクリトリスは敏感だ。その敏感な
肉豆をこれでもかというほど激しく
撫でる。イっててもイってても満足できないのだ。

今まで一切挿入したことのないアナルには
既に直径十センチはあろう太さのディルドを
挿入していた。それほどまでに性欲が
抑えきれなくなっていた。



彼女の野外オナニーは長時間に及ぶ。
最近では二〜三時間は超える。地面に
水溜りが出来るまで潮を吹き続け
絶頂回数は三桁を超え記憶にない。
しかし触手の効果でどれだけ絶頂しても
一切満足感が得られない。

むしろイけばいくほど性欲が増してくる
ようだ。そのせいで起きている時間は
食事中もシてしまうほど
ほとんどオナニーに費やしている。



三時間ほどイキ続けると股の疼きは
一切収まらないが仕方なく自慰をやめ
帰る準備をする。頭の中は真っピンクの
ままだが自宅には帰らなければならぬ。





「アレアレ、女の子がこんなところで下半身丸出しでナニしてるのかわかる？」
今まさに帰ろうとしていた可南美の所に二人の男組が現れた。路地裏とはいえ人に見つかってしまってもしょうがない。
ちようど下着を穿く直前だった。



「っ、これはそのどうしてもトイレが間に合わなくて…」
必死に言い訳をするが明らかに赤らめた顔、愛液まみれの
股が違うことを証明していた。

カシヤツ

「へえ〜そういう風には見えないけどねえ？」

あ、写真撮ったからばらまかれなくなかったら…

分かるよな？」



男はそういうとズボンを脱ぎペニスを可南美の尻に押し付けてくる。父親以外初めて見るペニス。それが既に彼女の大切な部分の目前に迫っている。「あ…あの…ど、どうしても…お、おまんこは許してください…お、お尻ならいいですから…中に…出してもらうても良いですから…」
膣のほうは触手が入っているので当然挿入されるわけにはいかない。



「ああ〜？まあそこまで言うならケツでやってやるか。
嫌いじゃねえしな」
男はそういうと可南美のアナルに挿入を始める。かなり
太いデイルドを使っていて彼女の穴への挿入は容易だった。
「おいおい嘘だろwこの女馬鹿みたいにケツ緩いんだけどw
一切抵抗しないんだけど、ガバガバ過ぎて全然
気持ちよくねえわw」

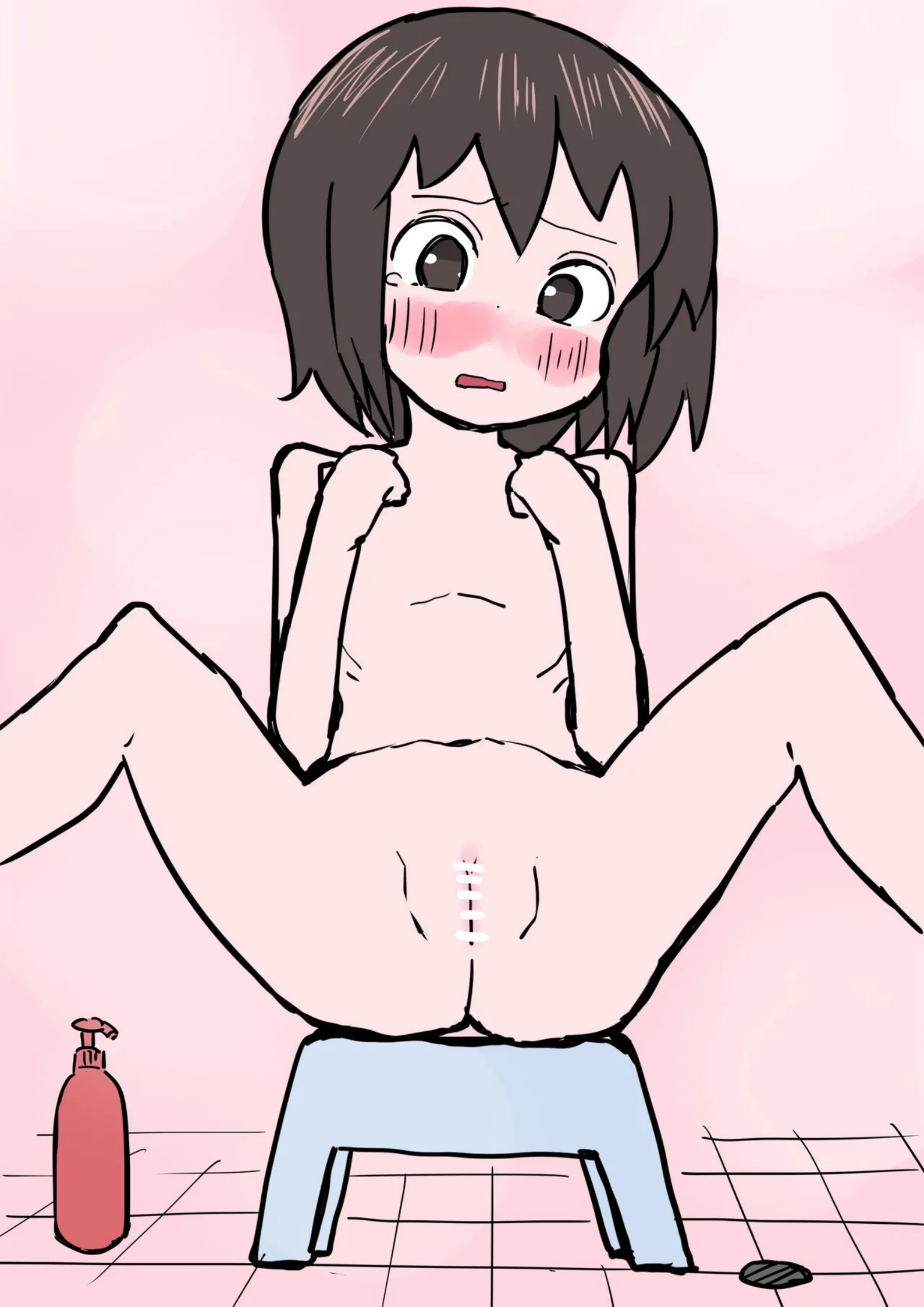


男は快感を得るために激しくピストンする。
「オラ、馬鹿みてえに緩いんだからこれでもかかってくらい
しっかりケツの穴締めろ！」
男を満足させるため可南美は必死に穴に力を入れる。
アナルに神経が集中したせいで挿入されてから
ものの数秒で絶頂、失禁してしまった。



「おいマジかよwこいつ感じすぎだろwクソ地味な見た目しといてド変態かよw」
可南美はレイプされながら罵られたことに絶頂する。
「お、多少は締まってきたな。イきそうだ…しっかり中に出してやるからな」
そういうと十分ほどしっかりアナルファックされ最後にたっぷりと中に射精された。





触手を膈内で飼育し始めて数週間。
成長した触手は子宮に侵入し
大きくなり続けていた。

Gスポットへの刺激は無くなったが
子宮内で蠢く触手の違和感
はとてつもない物だった。



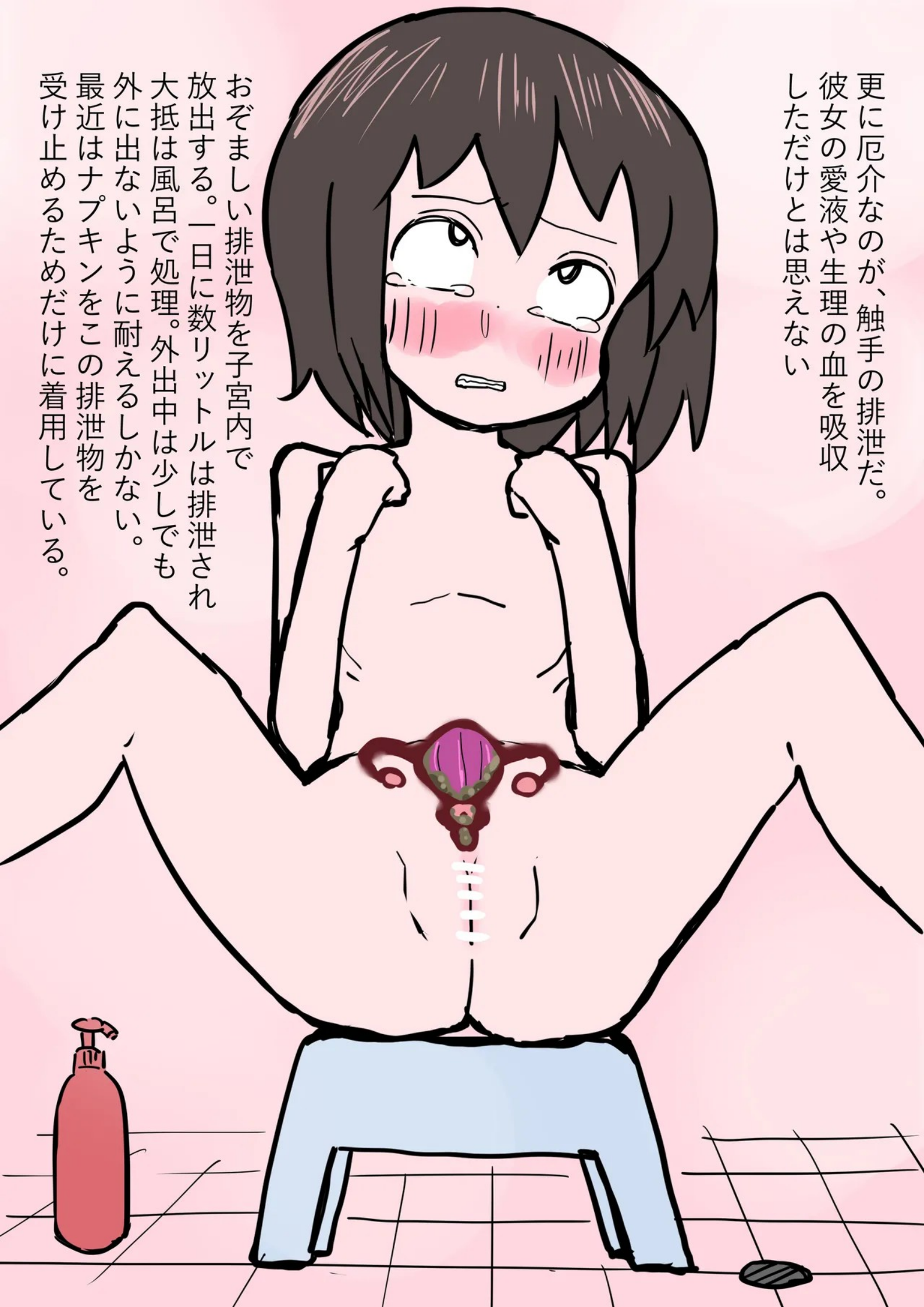
子宮内の触手は時折、手腕を
子宮口で出し入れする。

子宮口への外から中への挿入とは
また違った刺激に彼女は想像を
絶する快感を感じる。これが
二十四時間、外出中だろうが寝ている
時だろうが唐突に行われる。



更に厄介なのが、触手の排泄だ。
彼女の愛液や生理の血を吸収
しただけとは思えない

おぞましい排泄物を子宮内で
放出する。一日に数リットルは排泄され
大抵は風呂で処理。外出中は少しでも
外に出ないように耐えるしかない。
最近ではナプキンをこの排泄物を
受け止めるためだけに着用している。



可南美の大事な部分に排泄されているものはまさに汚物だ。自身の手の届かない大切な部分におぞましい物を

出されているという現実。更にこの排泄物には超強力な媚薬効果があり、体内に留めておけば留めておくほど発情していく。汚物に子宮を穢されながら彼女は日々欲情していた。





触手を飼い始めて約一カ月弱頃。可南美は三日三晩食事も睡眠も一切取らず自慰をし続けていた。もちろん風呂にも入っていない。触手による発情効果だ。育成が後半に差し掛かりラストスパートを掛けてきたのだ。彼女に自慰をさせることで成長を促す。完成するためにより安定的に自慰をさせる必要があるのだ。



触手がへその緒から栄養を本来なら逆方向に送る
事で彼女は食事や睡眠も取る必要なく自慰をし続ける
ことができる。愛液や潮の量は減ることを知らず三日間
垂れ流し続けている。母乳も出始め、触手が大きくなった
ことにより膨張した腹だが、強すぎる快感に必死な可南美は
一切気付いていない。



子宮一杯に大きくなった触手は彼女に栄養を送るが、代わりに絶頂や経血、卵巣といった物を栄養として受け取る。触手は彼女のホルモン状態を操作し常に生理状態にさせる。そうして常時経血を吸収する。とんでもない速度で排卵を繰り返すが、触手は待ちきれず卵管、卵巣へ触腕を侵入させ直接卵巣を捕食する。



三日三晩自慰をし続け体力がほとんど残っていない
可南美の身体は触手の出産を始める。先端のほうだけでも
かなり大きいのが分かる。触手は劇薬レベルの体液を大量に
産道に塗りながら這いずり出てこようとすする。その子宮口を
こじ開ける感覚、感度上昇の体液によって絶頂する。



ズルズルと大きな触手が姿を現す。身体が柔らかい故に何とか細い産道を出てきたといった感じだ。しかし、子宮口をこじ開けた触手は明らかに胎児の頭よりも太い。快感しか受け付けていなかった彼女の脳ですらついに激痛を感じる。しかし、涙や鼻水で顔をグチャグチャにしながら出産が終わるまでクリトリスを弄る手は休むことが無かった。





出産を終え気絶した可南美。三日間気を失い続けた彼女の母乳や愛液を吸収し続けた触手は家中に広がるほど巨大化し彼女を一切身動きが取れないように拘束していた。一方彼女は腹が大きくなり始めた辺りから記憶がなく、気付けば触手の餌食となっていた。肛門には彼女の腕より太い触手が突き刺さっており、腹に生存に必要な最低限の栄養となる体液を流し込んでいた。彼女には動き回る体力は一切残っていない。






可南美の排泄は三日に一度だ。彼女がちょうど目覚めたのがその日だった。排泄の時だけは肛門の触手が三日分の排泄物を強引に吸引する。その時は体液を送ることが出来ないため口から別の触手が養分を供給する。顎が外れるギリギリの太さの触手が一気に胃まで侵入し直接体液を流し込む。当然媚薬効果があり彼女は胃の内側まで性感帯と化す。そして何より今の彼女は触手を出産後で、強すぎる感度や触手挿入の不快感を正気のまま一身に受けてしまっている。



一時間ほど極太の触手で胃や食道を犯され続けた可南美。
排泄は終わり再び体液が腸に流れ込んでくる。浣腸の比に
ならないほどの便意に襲われるが極太の触手が穴を塞ぐどころか
体液を更に流し込んでくるため排泄できない。




結論を言うとその触手の目的は苗床の確保だ。苗床となる少女の中で成長し大きさが逆転したところで苗床とする。最初から最後まで性的に貪りつくすのだ。股の下から当たり前のように彼女の腕並の太さの触手が伸び一切躊躇なく挿入される。ズブズブと進みあっさり子宮に侵入、休む間もなく精液を流し込む。当然彼女の状態は操作されており妊娠は確定だ。

触手が成長するまで当然性感帯への責めは欠かさない。
クリトリスは包皮を剥かれ繊毛触手が休む暇なく撫で続ける。
妊娠中は更に排泄が制限され、尿道にも細い触手が入り込み
尿を吸収する。そのタイミングは触手次第なので何日も膀胱内の
尿が減らないこともある。排便に関しては一週間に一度になり
常に腹痛との戦いだ。更に細い触手が乳首に侵入し、乳腺を刺激、
母乳の出る量を増やす。





触手は約一か月間かけて子宮内に誕生し続ける。一つの卵子から何匹も生成されるのだ。無数の触手がどんどん成長し、彼女の腹は限界を超えて膨らむ。一か月間大量の触手を孕み腹に抱え性感帯を刺激され続け、排泄を制限される。屈辱的な苗床と化しても死ぬことは許されない。




約一か月半が経った頃。膣に挿入し続けられた触手が何の前触れもなくズリユリユリユと引き抜かれる。一切閉じることが無くなった膣口からは大量の体液が流れ出る。スーッとした空気を粘膜で感じながら、ついに出産が始まることを悟る。

子宮内の触手は苗床となっている可南美の意思を完全に無視し外へ出ようとする。子宮口をこじ開ける感覚はいくら体感しても慣れない。それが今回は百回以上味わわされることになる。又ル又ルの体液を纏わせながらズリユン、ズリユンと触手が子宮口を通り始める。クリトリスの愛撫が更に激しくなり出産を促す。





ポトポトと絶え間なく触手の子供が産み落とされる。膣は一切の締めりが無く、子宮口から出た触手はそのまま外に落とされる。連続して行われる子宮口の開閉が彼女を絶頂させる。今回は百三十二匹の触手の出産をたった三分で行った。彼女の膣や子宮へのダメージは計り知れないだろう。



最後の触手を産み終わり一息着こうとしたのも束の間。
触手が産み落とされた一秒後には彼女の膣には深々と触手が
突き刺さっていた。先ほどまで空気に触れていた粘膜に再び
ヌルヌルとした感覚が蘇る。そして十秒も経たないうちに
子宮は新たな精液で満たされていた。
そう、彼女はその命が果てるまで休みなく苗床として役目を
果たさなければならぬのだ。